

御蔵島イルカウォッチングガイドの役割と今後の課題

小木 万布（一般社団法人御蔵島観光協会）

キーワード：御蔵島、イルカウォッチング、スキンドайビング、野生生物、自然解説、安全管理

1. はじめに

御蔵島は東京の都心から南へ約 200km、伊豆諸島のちょうど中ほどに位置する周囲 16km の小さな島だ。黒潮が流れる周辺の海は 1,500m を越える深さになるので、外洋にうかぶ島と言って良いだろう。長年にわたる波の侵食によって島周りはどこも数百 m の断崖となり、砂浜どころか湾や入り江も全く存在しない。1970 年代、伊豆諸島は空前の離島ブームにより年間 140 万人もの観光客がおしよせていたが、御蔵島への来島者数は年間数百人、交通の不便さから観光業とは全く無縁の島であった。1990 年代初頭、島の周りで野生のイルカが観察できることが明らかになると、イルカウォッチング開始 2 年後には、年間 6000 人もの観光客が訪れることとなった。島に訪れる観光客だけでなく、島外からも漁船がイルカウォッチング客を乗せて渡島するようになり、御蔵島の周辺海域は急激に多数のウォッチング船が操業するようになった。このような状況の中、御蔵島島民は降って湧いたイルカ景気に浮かれるのではなく、観光客の急増によるイルカの生息数や生息域への影響を懸念し、1993 年には村民有志で御蔵島イルカ協会を設立している。設立の目的は、ルールの周知や生息数調査であった。

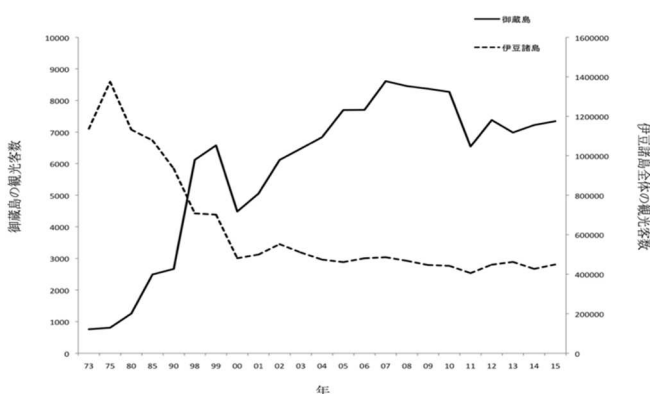


図 1. 御蔵島と伊豆諸島全体の観光客数の推移

2. エコツアーリズムの開始

商業的イルカウォッチングの開始から約 10 年が経った 2002 年、保全とのバランスをとった自然利用を押し進めるべく御蔵島村は、「自然保護条例」を施行した。2004 年 1 月には、東京都と御蔵島村との間で「自然環境保全促進地域の適正な利用に関する協定書」いわゆるエコツアーリズム協定が締結され、自然保護条例で村長が定めた保全促進地域において観光を行うにあたっての要件が定められた。すなわち、観光客の立ち入りには必ず東京都認定ガイド資格保持者が同行しなければならない、利用時間、1 日あたりの立入り客数、ガイド 1 人が連れて行ける客数にも上限が設けられること

になった。ガイド資格は、都が行うガイド認定講習（12 講義 23 時間）を受講せねばならず、資格の保持のためには 2 年ごとの更新講習の受講が義務付けられている。御蔵島のイルカウォッチングにおけるガイド制度は、ここから始まったと言えるだろう。

3. イルカウォッチングのガイド？

エコツアーリズム協定書が発効してから海や山への観光目的での立ち入りにはガイドの同行が義務付けられたが、イルカウォッチング船に関しては船長＝ガイドであり、いわゆるインタープリターとしてのガイドとは意味合いが少々異なっていた。当初、イルカウォッチング船に同乗する（船長以外の）ガイドの必要性はあまり重要視されておらず、船長 1 人が乗客を連れていくか、船長以外のスタッフが乗る場合も民宿のバイトがレクリエーションで同船している、というニュアンスであることが多かった。この理由として、イルカウォッチング活動中の最高のエンターテイナーは、イルカそのものであることが挙げられる。そもそも御蔵島周辺では、限られた範囲に驚くほどの密度でイルカが生息しており、海況さえ良ければイルカとの遭遇率はほぼ 100%ということになる。出港した途端、船首波にイルカがついて来た！ということも起こる。1 ツアー 2 時間ほどの間に最大 8 回エントリーとエキジットを繰り返して、客はイルカと一緒に泳ぐ。ガイドがイルカについての解説を語る暇もなく、客はイルカとの遭遇を十二分に堪能してしまうこの状況では、解説者としてのガイド需要は発生しにくい。ウォッチング船の経営者である船長も、経費の面から専属ガイドを雇用することに二の足を踏んでいる状況であった。

4. ガイドの義務化

しかしイルカウォッチングの質向上のためにも、インタープリターとしてのガイド同船は必要であった。そこで、最初は安全管理上のメリットを全面に出して船長以外のガイドの乗船を推進することにした。ほとんどの客はイルカと泳ぐために水中へエントリーするため、船上にいる船長には目の届かない危険もあるからだ。7 名以上の客を連れて行く際には、船長以外のガイドの乗船を義務化した。このことによってほとんどの船が専属のガイドを雇うようになり、季節労働ではあるが安定した雇用が生まれたことによって、ガイドの島での滞在期間も伸びた。そのまま島で結婚するガイドも多く、島の出生率も伸びた。安全管理体制はもちろん、御蔵島の海やイルカに詳しいガイドが同船することでウォッチング自体の質も格段に向上したと思われる。「ガイドが乗船することでツアー催行が楽になった」ことを実感した船長も多かった。ガイド義務

化から数年、出産育児を経て再びガイド業に復帰したケースもある。長らく携わっているガイドは、技術も向上するため、自身に集客力のあるガイドも増えてきている。

5. 今後の課題

ガイドの質の向上がその野外活動、さらには地域全体の魅力向上に大きな役割を果たすことは、論を俟たない。しかし、御蔵島におけるガイドの雇用条件【所得】は決して良いとは言えない。島に根ざした、より息の長い人材確保のためには、雇用条件の改善は必要だろう。御蔵島は、ガイド制が法整備されているだけでなく、過去 30 年にわたって詳細なイルカの生態調査が組織的に行われている。これら専門的な知識もインタープリテーションの現場に落とし込み、ガイド技術の継承ができる取り組みを今後、進められればと考えている。

参考文献

- 1) 小木万布, 2018, 御蔵島のイルカウォッチングとエコツーリズム, Ebucheb, 68 : pp.2-6
- 2) 東京都環境局, 2008, 東京の自然公園 島しょに置けるエコツーリズムのしくみ,
<https://www.kankyo.metro.tokyo.lg.jp/naturepark/know/ecotourism/shikumi.html>
- 3) 御蔵島イルカ調査チーム mido ホームページ, 研究業績,
<https://midolphin.jimdofree.com/%E5%87%BA-%E7%89%88-%E7%89%A9/>